

赤き荒野の異邦人

高柳総一郎

RED WASTE LAND
by
Soichiro TAKAYANAGI 2016

錆ついた鉄塔の化け物。それがこの港に誰もが抱くイメージだ。軌道エレベーターがゆつくりと下降を終え、圧縮空気を排出口から放つ。第七植民惑星。名前が付けられていないのは、ここが地球からの植民惑星だからだ。

一人タラップを降りた男は、目深に被ったテンガロンハットを親指で押し上げた。鋭い眼。鷲鼻の下には綺麗に整えられた口ひげ。眉やひげ、もみあげには白いものが混じり、彼がそれなりの年齢を重ねていることを感じさせる。黒いスーツにループタイ。古臭い映画から抜け出てきたような、黒いブーツ。手には黒いアタッシュケース。

おぎなりな入星管理官にくしゃくしゃの金をパスポートに挟んで渡し、男は大地に降り立った。地球から遠く離れた、居住可能な惑星ではあったが、その発展はあまりにも遅れていた。見渡す限りの赤い大地。それもそのはず、この惑星は地球本星から見捨てられて久しい。

タクシー・プールには誰もいない。車一つない。まるでこの港だけが、どこか遠く

「旦那。タクシーを期待してるんだったら、ここにはありませんぜ」

清掃員らしきつなぎ姿の老人が、ダスト・カーゴを押しながら言った。男は構わずスーツのポケットから電子パイプを取り出し、啞えた。スイッチを押すだけで、吸った気になれる代物だ。男はうまそうに紫煙——実際には水蒸気だ——を吐き出す。

「みいんな鉾山に行っちゃまって」

「鉾山？」

男は低い声で言った。

「金鉾山さ。少し前に、新しい鉾脈が発見されてよ。男はみんなそこに行っちゃった」

「あんたは行かないのか」

「年金暮らしでね。わざわざあんな恐ろしいところに行く気はねえ。この星にや、重機を動かす燃料が高くて仕方ねえからよ。作業員が直接つるはしで掘るってんだぜ。イカれてる」

「そりや恐ろしいだろうな。……街にはどう行けばいい？」

「レンタホースが便利だぜ。二時間も走らせれば立派な街がある」

老人が指さした先には、馬らしきものが柱につながれていた。馬と言えば、馬に見えない事もない。しかし目がある部分にはバイザーがかぶせられており、心臓が脈打つたびに、血管が青く発光している。特殊溶液を血液に混ぜられたことにより半不死となった改造馬である。

「金は？」

「いらんよ。だがチップくらい払ってくれてもバチは当たらんぜ、旦那」

老人は手を差し出した。男はわずかに口角をあげて、気持ちよく一地球統一ドルを一枚握らせてやった。

ヴァンは当てのない旅を続けている。

生まれ落ちたのは地球だが、既に故郷を離れて久しい。人類が彼と同じように故郷を離れ、テラ・フォーミングにより植民惑星を次々と誕生させて既に半世紀が過ぎた。当初危惧された、自分たちと同じような知的生命体がいた場合を想定し『植民惑星』と名付けた人類も、ようやくそれが無駄な配慮であったことを思い知った。

しかし、彼らが見つけた惑星には、それぞれこれまでの人類が見たこともないあらたな地平線が広がっていた。くしくもそれは、各惑星に地球の歴史を再現させた。過去の人々の知恵の集合体は、自然と各惑星に適したライフスタイルを提供していったのだ。

そしてこの第七惑星は、はるか昔のアメリカを連想させた。自由。そして自由に命という巨大な自己責任が伴う、原始時代のアメリカ。偶然か神の導きか、この惑星に金鉱が発見されたのもそれに拍車をかけた。これから、この星はかつてのアメリカのような混沌を迎えるのだろう。歴史に学んだ人々は、こぞつて金鉱山を採掘しにこの

星を訪れた。

そして金鉱山は掘りつくされた。当然、人々はそれに落胆し、惑星を離れていった。もう二十年は昔の話だ。それが最近、新たな金鉱山の発見に沸き立っているという。ヴァンはそのまことしやかな噂を聞きつけた。もはや誰もその存在を信じていない金鉱山。星から星へ渡るのは、まだハードルが高い。ヴァンのような、定住の星を持たぬようなノーマッドでなければ、登録された地球住民は地球外へ出るのに非常に苦労するし、逆もまたしかりなのだ。

レンタホースを街の駐馬場につないで、ヴァンは黒いコートの襟を正す。埃が舞う。テンガロンハットを指で押し上げると、砂塵の巻きあがるさびれた街が目に入った。

「静かなところだ」

ヴァンは電子パイプを咥え、わずかに口角を上げ、ゆつくりと街を歩き始めた。なるほど、どうやら人がいないわけではないらしい。二階の窓から、カーテンや雨戸を閉めるものの姿が見える。

彼は酒場の看板が砂埃に揺れているのを見つけた。迷わずスイング・ドアを押し開ける。騒がしかった酒場が水を打ったように静まり返り、その場の全員が男を視線で追った。

「どこからきたんだい、あんた」

鼻の下に貧相なひげを生やした、細い体つきのマスターがこつちを見もせずと言った。

「よそのものに出す酒はないのか」

「まさか。金さえありや俺は構わない」

ヴァンはくしゃくしゃの統一ドル札をカウンターに載せた。

「ビールだ」

マスターが冷えたビールを置く。ヴァンはそれに口をつけたが、すぐに吐き出した。呑めたものではない。自分の小便でも飲んだ方がマシだ。腐っているのではないのか。

「何しに来たんだ」

「この街じゃ何もかもあんたに言わなくちやいかんのかね？ 目的なら入星管理官に言う言つてやったさ。観光だよ」

「こんな何もない星にか？ ……悪いことは言わん。金鉱山の話聞きつけたんなら、もう遅い。行っても殺されるだけだぞ」

殺される。ヴァンはマスターに顔を見られぬようにふつと笑みを浮かべた。上等だ。殺せるのなら、殺せばいい。

「そうだぜ。……金鉱山は、レイル一家のものになっちまった」
老人が声を挙げた。

「あの鉱山は、俺たちのものだったんだ」

「そうだ。あいつらさえ来なかったら……」

ぽつぽつと湧き上がる不満。恨み言。レイル一家とはずいぶんな輩らしい。この星にも政府があるし、法律がある。しかし、電磁砂嵐のせいで満足な通信が届かない。

政府はもちろん法律も原始的になる。きわめて単純な法が、人間を支配する。

それは、悪党には死を与えるべしというもの。

力を力で押さえつけるという単純な法。それは裏を返せば、力さえあれば法すら無視できるというものだ。そうした単純さに、魅力を感じる者も少なくはないだろう。ましてや、金鉱山までであると知れば、それを支配しようとする輩も当然出てくる。当たり前のことだ。それに一番早くたどり着いたのが、レイル一家だった。おそらくは、そういうことなのだろう。

「金鉱山がそんなに魅力的なものかね」

「そりやそうだ。確かに危険だが、あそこに眠ってる金を独り占めにしてみる。星でも買えただろうに」

「大きく出たな。それに、保安官はどうした」

皆が口ごもるのを見て、ヴァンはこれ以上の詮索は無駄だろうと立ち上がる。彼らには何も希望が無い。よく見れば酒をあおっているのは老人ばかりだ。女子供はおろか、若い男もいない。

「……あんた、悪いことは言わん。はやく街を出ろ。保安官のデイヴィスに見つかつたら、縛り首にされてもおかしくないぞ」

「デイヴィスか。保安官に名前を聞く手間が省けた。感謝するよ」

スイング・ドアが揺れる。酒場の中に再び絶望が満ちる。何も出来ぬ無力感と、変わることのない運命への虚脱感が満ちる。

保安官事務所の看板は取れかけていた。

ヴァンは電子パイプを咥えたまま、立て付けの悪いドアを開ける。中に人の気配はない。

「勝手に入ってくるな」

巨大な安楽椅子——正確には、安楽椅子型の充電ポートに腰かけた、見るからに旧世代型の丸いボディのアンドロイドがスリット状の目を光らせる。でっぷり太った丸い腹の上に、それより小さい丸い頭がついている。

「デイヴィスか？」

「デイヴでも構わないぜ、ゲスト君。名前を覚えてくれ」

デイヴは球体にあるスライド式の窓を開くと、そこから細いマニピレーターを起動させる。コートかけにかかっていた、これまたふるぼけたこげ茶色のテンガロンハットを自らの頭に被せた。

「なんだっていいじゃないか、保安官殿」

「そうかね。ではゲスト君、早く出て行ってもらえんかね。私は充電に忙しい」

「あんたはこの街を仕切つてると聞いたぜ。……もつとも、安楽椅子に座った保安官

なんて勤まると思わんが」

モーター音と共に、デイブは別の窓を開け、そこから実に——実にバカデカイ銃を出した。リボルバー構造を持つショットガン。

「表に出ろとは言わないぜ、ゲスト君。俺は正義を間違わない男だ。悪党は死すべし。荒野の掟を常に忠実に守ってきた。君をストリートの染みにすることもたやすい。……手をあげろ」

ヴァンはおとなしく手をあげた。保安官はスリットから男の戦力分析を行っていた。銃の類は持っていない。この荒野を丸腰でやってくるなど、考えられないが、それ以上で自分のスキヤンが間違っているとも思わなかった。

「……わかった。俺が悪かった。ゲスト君、手を下ろしてよろしい」

「染みにするんじゃないのか」

「するさ。街に来て銃を持つている奴はみんなそうしてきた。……だが、レイル一家は別だった。……俺はやつらにやつらの敵になるやつらをストリートの染みにさせられている。もっとも弾が勿体ないんで、最近は縛り首にばかりしているが……ともかく、保安官用のプログラムを書き換えられてな。電力の負担が極端に大きくなつて……まともにもここから動けないときた」

デイブは電子合成音声で残念そうにそう述べながら、彼の自信の元をゆつくりとしまった。

「俺はヴァンだ」

「ヴァン。いい名前だ。……言っておくが俺はみんなにこう言うようにプログラムされてる。悪く思うなよ」

ヴァンはどつかとそばにあつた椅子に腰かけ、デイヴに向き直り、電子パイプを咥えなおした。デイヴはスリットから赤い光をちらつかせていた。

「レイル一家と言うのは？」

「元統合宇宙軍の軍人をやつてた連中だ。『一家』というのは、まあ仮称というかただ名だな。辺境惑星の治安維持業務を請け負う傭兵に身を落として、最終的には金鉱山の支配者をやつてる……まあありていに言えばクズどもだ」

「最近のアンドロイドは口が悪いんだな」

「ボキヤブラリーが豊富と言ってもらいたいね、ヴァン君。金鉱山あたりに、やつらは派手な街を作つてる。こんな街とは比べ物にならない。女も若いのも、全員そつちに行つちまった。ここにいるのは取り残された老人と、役に立たん保安官アンドロイドだけつてわけさ……」

ヴァンにはやりと笑みを浮かべると、立ち上がった。クズどもが街を作った。金鉱山を奪つて、それを資金源にして。大した話だ。

「ところでヴァン。君、その右手の人差し指と中指はどうした。スキャンした時に気付いたが、あんたはその二本の指だけが機械なんだな」

ヴァンは白い手袋をはめた右手を持ち上げ、にやりと笑った。

「……俺は死神なのさ。あんたが全身機械の保安官なら、俺は機械の二本指を持つ死

神ってわけだ」

「詩人だな」

「あんたのボキヤブラリーも豊富だ。恐れ入ったよ。……じゃあな」

安楽椅子が揺れる。保安官の顔のスリットを、赤い光が走る。あの男は鉱山の街で死ぬだろうか。生きるだろうか。すくなくともこれまでのデータを鑑みるならば、武器を持たぬものに、生きていける道理などないはずだ。この赤い荒野を行く者が、牙を持たぬなどありえない。

「幸運を祈ろう、来訪者」

機械の保安官は窓の外を吹き荒れる砂塵の中を、ヴァンが歩いていくのを見ていた。やがて砂塵が彼の背中を覆いつくし——見えなくなった。

ゴーグル越しでも、吹き荒れる砂塵のため視界は狭い。レンタ・ホースに乗っていても、辛い旅と言ってよかった。砂塵の中は暗いが、目的地を照らす輝きはそんな暗さを吹き飛ばすに十分なものであった。

色とりどりのネオン・サインの輝き。割れたスピーカー・システムから鳴り響く猥雑な音楽——。

鉾山の作業場を照らすのであろう強烈なランプが、山肌に張り付くように発達した大通りを激しく照らす。まるで真昼のような世界に、星々の輝きのようにネオンがまたたく。ゆるやかな坂道の頂上に、鉾山採掘用の巨大トンネルが大きく口を開けていた。

ヴァンは、お決まりのようにレンタ・ホースを駐馬場に停める。砂塵は既に去り、見上げると夜空が街の発する人工の光に半分ほど埋め尽くされていた。

その時であった。ヴァンの背中に、何かが押し付けられているような感触があった。彼は何か言われる前に、ゆつくりと両手を掲げていた。

「手なら挙げた」

「ずいぶん素直なこと」

女の声であった。ヴァンは小さく笑いながら、その言葉に答えた。

「争い事は嫌いでな」

「よく言うわね。目が普通じゃない。……大方、金鉾山の噂を聞いてきたんでしょ」

ヴァンはまるで一流モデルのようにその場でゆつくりと回転すると、声の主の姿を見た。テンガロンハット。古ぼけたポンチョを羽織り、手には最新型のリボルバー式レーザー・ガンが握られている。無重力空間においても戦えるように、物理弾ではなくその名のとおりの高出力レーザーを発射できる携行武器で、今の時代ポピュラーな携行銃器でもある。

「だったらどうする」

「撃つわ」

「ここから南にいったところにある保安官もそう言つたぜ」

「ここには保安官はいない」

「じゃあ君は？」

女はレーザーガンの銃口をテンガロンハットのつばにおしつけ、押し上げた。ネイビー・ブルーの美しい瞳が、ヴァンを射抜き、いたずらっぽく女は笑つた。

「知らない男に名を名乗るな。……おじいちゃんが言つていたわ。それに、名前なんてここじゃ些細な事よ」

ヴァンは笑い、親指と、機械の人差し指、中指で口ひげを撫でつけながら言う。

「金が出ると聞いた」

「出ないわ」

「……レイル一家が支配していると聞いたが」

女はただ笑い、ポンチヨを翻しながら坂道を登っていく。ヴァンは女の背を追い、坂道を登っていく。手にはアタッシュケースを持ち、ぽっかりと口を開けた鉱山の入口へと向かつて、光の海を泳ぎながら。

「はるばる昔話を聞きに来たの？」

「さつきの街で聞いた話とはずいぶん違うようだが」

妙な気分であつた。猥雑な音が飛び続けるスピーカー。ネオンによる色とりどりの人工の光。坂道を登っていくたびにヴァンは気づく。人の気配がない。

「レイル一家が金鉱山を支配してたのは、もう二十年は昔の話よ」

「バカな。空港じゃ少し前だと言ったぞ。街の酒場でも——」

「この星に人間は一人もいないわ。本物はもう、二十年前に死んでしまった。——残っているのは、死んだ歴史にしがみついたままのアンドロイドだけ」

坂道を登り切った二人の目の前に、暗い穴が広がっていた。しかし鉱山の入口とは思えぬところであつた。坑道というよりは、自然に出来た広い洞穴といった方が正しい。

無数に立ち尽くす十字架。無数の死。輝く坂道。人のいない街。老人たちだけの酒場——。

「誰の話も間違つてはいないわ。ここにはレイル一家というならず者たちが存在して、娼館やらカジノやら立てて、あくどく金を搾り取つてた。そういう星だったの、ここは。でも今ではもうそうじゃない」

「そんなことが、なぜ君に分かる」

「私がそれを伝えられる最後の存在だから。……この星はあなたのような人たちのための墓標なの。時代遅れの英雄さん。戦争でも死ねず、家族という存在にも恵まれず、故郷も捨てた——。星々を渡り歩く旅人の最期の墓標」

ヴァンは電子パイプを放り投げ、アタッシュケースをその場に落とした。跳ねるようにケースの口が開き、ただ一つ入っていたクローム・シルバーのバレルが輝く。

「悪い冗談だと思いたいね」

「ここはかつてあつたアメリカという国の幻影よ。異邦人（ストレンジヤー）さん。あなたもこの星に惹かれた幻影——私は幻影の墓を守るための墓守と言うわけ」

ヴァンは人差し指を差し出し、手を銃のような形にした。その先に、クローム・シルバーのバレルを装着する。名もなき女の姿が、バレルの先に付いた照星に重なる。「お嬢さん。死神を墓に入れられるとでも？」

女の手は、既に腰に下げた革製のホルスターにかかつていた。いつでも抜けるという意思表示。人工の太陽のごとく、作業用ライトが二人を激しく照らす。

「やつてみなくちゃわからないわ」

砂塵が舞い上がる。ヴァンの額から汗が流れ、ひげに到達し、その端から落ちる。水滴が地面から跳ねた。直後、ネオンサインの一つがばちばちと激しく音を鳴らす。

空葉莢が落ちる音と、エネルギー・カプセルが炸裂した音は、ほぼ同時であつた。女のポンチョに黒い穴が開き、口から真っ白な血がライトに照らされ輝く。人工血液。かりそめの命が流れ出ていく。女はレーザーガンを落とし、後ろに倒れた。ヴァンの体には、レーザーは当たっていない。かすつてすらいない。

「何故撃たれるような真似をした」

「……墓守するのに、疲れたの」

猥雑な音楽が流れる、壊れかけのスピーカーのように、女の声帯はかろうじて電子音声を——遺言を流していた。

「ここを一人で守るのは——とても寂しいから。……あなた、名前は？」

「ヴァンだ」

「ヴァン。私の頭を撃ち抜いて。私を眠らせて。私の名前を、私の血で、墓標に書いて——」

ごぼごぼと、ホワイト・ブラッドが口から吐き出される。人工臓器に置き換えられた人間であろうと、痛覚はある。死の際に苦しむ。楽にしてやらねばならない。ヴァンは人差し指のバレルを中指に付け替え、彼女の眉間に照星を重ねた。

「あなたの名前は？」

「……モンコ」

「そうか」

銃声。流れるホワイト・ブラッド。ばちばちと光を失うネオン・サイン。暗闇と砂塵の中に埋まってゆく街を見下ろしながら、ヴァンは電子パイプを拾い上げた。

墓の下に埋まる墓守のは『良い人』だったのか『悪い人』だったのか。モンコは何も語らず、逝った。

ヴァンは遺言通り墓を建て、乾きかけのホワイト・ブラッドで彼女の名前を書いた。

モンコ。孤独と共に墓標を守り続けた女。彼女の遺志になかったように、この星にはもはや墓守は必要ないのだろう。

ヴァンはただ砂塵のみが吹き荒れる荒野を、レンタ・ホースにまたがり行く。ヴァンはまだ死なない。彼女のように眠るに値する墓標も見つからない。どこへ行っても、彼は異邦人なのだ。おそらくは、永遠に——。

赤き荒野の異邦人
終